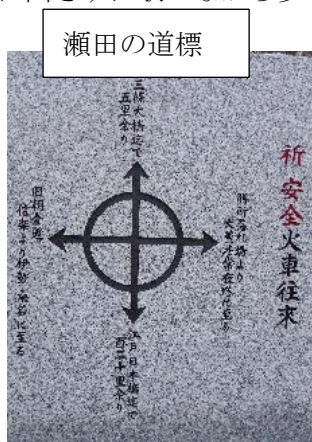


中山道 69 次ウォーキング 19 日目

瀬田駅-----大津-11.7Km-京都三条大橋

12月5日、前回到達の瀬田駅を9時半スタート、雲があるものの晴れ。11月末に歩く予定だったが寒波襲来で延期し本日となった。本日のコースを歩くのは4回目、瀬田駅からお馴染みの道標まで10分程歩いてから中山道となるが、草津からは東海道と同じなので、道標としては「東海道」となる。瀬田の唐橋ではいつものボート練習風景、一人、2人から10人程で漕いでいるものまで、或いはメガホンを持ったコーチらしき人のモータボートもあり、様々なサイズのボートが見渡す範囲で30隻以上、唐突に、「・・・ボートは沈みぬ千尋の海原・・・」と「真白き富士の嶺」が頭に浮かび、メロディが頭の中を流れ始め、口に出さずに歌いながら歩いていると、なんだか物悲しい気持ちとなる。



石山の商店街にさしかかるとチンドン屋の賑やかな音が聞こえ、パチンコ屋のリニューアルオープンの宣伝で、カメラを向けたら先頭のお姉さんが手をふってくれ、気分はまた高揚、我ながら単純!

黄と赤のコントラスト



石山から膳所(ぜぜ)へ、折れ曲がりの多い旧城下町の道となるが、城跡などは何もなく、跡を示す標識のみ。旧家と寺の多い街中で、突然モノクロからカラーとなったようなイメージで銀杏の黄色と紅葉の赤の旧家が現れ、足を停めた。そんな旧家の中で1階の屋根に人形のようなものを置いた家がある。同様な人形を同様な場所に置いた家が何軒もあり、魔除けと思うがこの辺の風習か?



左の家の屋根
の人形



別の家の屋根
の人形



大津宿 69 番目

木曾義仲と芭蕉の墓のある義仲寺は土曜日にも拘わらず静かで観光客は見当らず、立ち寄らずに素通り。ひたすら歩いて大津に到着、宿場の遺構は残っていないものの、旧家が多い。街角に「ロシア皇太子受難の地」の石碑があり、当時のロシア皇太子がこの地で日本の巡査に切りつけられたもので、大国ロシアを恐れた日本は明治天皇が京都に駆けつける大事件となった。その皇太子は後に皇帝となって革命勢力を弾圧し、ロシア革命で処刑されるが、ネットで面白い記事を見つけた「この事件に遭遇して以降、皇太子は日本人に嫌悪感を持つようになり、ことあるごとに日本人を「猿」と呼ぶようになる。ロシア首相セルゲイ・ヴィツェは皇太子の日本人蔑視が後の日露戦争を招いたと分析している」。大津での昼食は温かい蕎麦と握り寿司の定食。

ロシア皇太子
受難の地



蟬丸神社と逢坂の関

蟬丸神社には逢坂山のふもとにある下社と中腹にある上社があり、下社は入り口を鉄道が走っていて踏切の先に鳥居がある。上社は国道 1 号線沿いにあり、横断歩道を渡らなければ参詣できない。何で両方ともややこしいアクセスとなっているのか不思議である。

踏切を渡ると下社



国道 1 号線の向こう側にある上社は
横断歩道まで回り道となる



逢坂山を登ると、峠には逢坂の関跡があり、休憩所になっていて、三つの歌碑がある。いずれも百人一首でお馴染みのもので、以前に来た時とは異なり、歌碑は雑草に覆われている。

逢坂の関の歌碑



是れやこの 行くもかへるも 別れては
 知るもしらぬも 逢坂の関 蟬丸
 名にしおはば 逢坂山の さねかつら
 人に知られで くるよしもがな 三條右大臣
 夜をこめて 鳥の空音は はかるとも
 世に逢坂の 関はゆるさじ 清少納言

車石

江戸時代に逢坂越は、大津港で陸揚げされ京都へ運ばれた米俵などの輸送にも重要な役割を果たしました。これら物資を運ぶ牛車が泥道で立ち往生しないように車石と呼ばれる石が敷設されました。その工事は文化元年(1804)から翌2年にかけて行われました。車石は、今も京都・大津間の旧東海道沿いに残されており、当時としては画期的な街道整備を知る貴重な文化財となっています。

車石の説明



『逢坂越と車石』 鈴木靖将画

車石



上の写真は逢坂の関跡にある案内板で、車石の説明があり、牛車用に道に敷かれた石と書かれている。左の写真はその車石の実物を立てて置いたもので、真ん中の丸い溝は車輪の為の溝。このような車石があると云うことは、牛車の車輪の間隔が標準化されていたことを意味する。

それではその標準はどのように文書化され、車輪の幅と間隔の許容誤差はどの程度であったのか、などと考えてしまうのは技術者の性か?

山科地蔵

「日本一のうなぎ」ののぼりが何本も翻る大谷を過ぎ、逢坂山を下ると山科となり、「京都市」の表示があつて、滋賀を抜けて京都に入ったことになる。

徳林庵の地藏堂



山科の徳林庵に六角の地藏堂があり、そこに「山科地藏」が祀られている。その謂れは、「山科地藏は小野篁(おののたかむら)公により852年に作られた六体の地藏尊像のうちの一で、初め伏見六地藏の地にあった。後白河天皇は、都の守護、都往来の安全、庶民の利益結縁を願い、平清盛、西光法師に命じ、1157年、街道の出入口6箇所于一体ずつ分置された。以後、山科地藏は東海道の守護佛となった」。

この山科地藏は拝観できなかったが、その横に可愛らしい六地藏があった。三頭身の一体さんマンガチックの現代的な六地藏で、顔がいかにも子供の表情となっている。

徳林庵の六地藏



荷馬用の井戸



また、この六角堂には荷馬用の井戸があり、左のような文字が刻まれている。

ネットで調べたところ、「宰領（さいりょう）とは、荷物を運送する際、人や馬の管理・監督をすること」とあった。

京都に到着

歩いている山科の道路には三条通りと書かれており、このまま歩けば三条大橋に行き着くが、旧中山道(旧東海道)は天智天皇陵付近で住宅地の中を通る小道となり、峠を越えると蹴上の浄水場があり、その次は都ホテルで、観光客が一気に増えて歩道は人であふれており、「粟田口」から京都に到着。

光秀塚

三条通りから白川を南に曲がり、5分程歩いて光秀塚に寄り道。

光秀塚



光秀饅頭

1個 150円也



明智光秀は歴史上の人物としては人気がないせいか、街角の地藏堂程度の小さなお堂に木像と遺骨が祀られており、他に観光客は見当たらない。塚の横に「光秀饅頭」の看板があって和菓子屋がある。その光秀饅頭買い求め、何が「光秀饅頭」なのかと聞くと「饅頭に明智の家紋の焼印が押してある」とのこと、歩きながら食べたが、ごくごく普通の饅頭。饅頭屋のおばさん曰く、この前、光

秀の子孫と云う人がきて「本能寺の変 431年目の真実」との本を出版したと宣伝していったが、光秀は頭が良かったのでその子孫も頭が良い。

京都のほうきや

三条大橋のすぐそばに「ほうきや」があり、庭掃除に使う竹箒も売っているが、主たる商品は棕櫚(しゅろ)で作ったほうき、はけ、たわしの類で、色んな種類があり、観光客のみならず地元の客も多く賑わっていた。この店のものは具合が良いとのことで、お菓子に使う小さな10cm足らずの棕櫚の「はけ」を家内は買い求めた。昔の駄菓子屋のような鄙びた店舗だが、こんな専門店が目貫通りにあるのも京都。

菓子作りに使うハケ

これで千円也



マンホールの蓋

大津のマンホールの蓋は「てんこもり」で賑やか、「琵琶湖、琵琶湖大橋、ミシガン船、ヨット、観覧車、市の鳥・ユリカモメ、市の花・エイザンスミレ、市の木・ヤマザクラ、花火大会、レガッタ、びわ湖花噴水、犬」。京都は真ん中の京都市章と御所車、京都のもう一つは御所車のかわりに二の字(まさか下駄の歯ではないだろうな)のシンプルなもの。

大津



京都



京都



京都三条大橋

三条大橋着は午後3時、5年前の東海道ウォーキングでは孫の出迎えを受けたが、今回は家内のみ。 本日は4万歩。

東海道53次の公称492Kmは20日で踏破、但し、宮と桑名間の27Kmは海上なので、歩いた距離としては465Km。 中山道69次534Kmは19日で踏破したので、1日平均は東海道の23Kmに対し28Kmと2割程伸びている。歩数については、東海道は96万歩で4.8万歩/日。 中山道は11日目と12日目は歩数計を忘れており宿場間の公称距離の52.9Kmを歩幅70cmで計算し、総計102.7万歩で5.4万歩/日に増えている。



三条大橋にて

楽しかった中山道ウォーキングは完了し、次の計画を色々と空想しております。

長い間のご愛読、まことに有難うございました。

19日目

